# ６［評論］『レトリックのすすめ』

　現在日本ではレトリックは二つの意味で使われている。つまり「うまく話す技術」と「うまく書く技術」である。前者には「弁論術」「雄弁術」という訳語が、後者には「修辞学」（言葉を飾る術）という訳語がそれぞれ当てられている。語源的には「弁論の技術」という意味合いなので、本来からいうとレトリックは「うまく話す技術」のことだったはずだ。しかし時代が下ると、わけても例の活版印刷の発明以来「書くこと」の重要性が増して、口頭弁論の役割が縮小されていくにつれて、いつのまにか「修辞」がレトリックを代表するａカッコウになってしまった。今では①レトリックといえば「修辞学」を思い浮かべる人のほうが多いはずだ。レトリックに二つの意味があるのは、レトリックの歴史をｂハンエイしているわけである。

　では、本来のレトリックはどういうものであったのか。それを知るためにはレトリックの歴史を簡単に振り返る必要がある。

　レトリックの起源は今を去ること二千年以上の昔、紀元前五世紀頃のギリシアにさかのぼる。その頃、ギリシアの植民地（シチリア島）で悪政が廃されたあとに民主的政体が樹立された。そしてに没収された土地がもとの所有者に返還されることになった。その土地の所有権をめぐってｃソショウが続出した。当時は法律の専門家など存在しなかったので、自分の権利は自分で守るしかない。本人自身が市民法廷で証言しなければならなかった。当然のことながら弁の立つ人がいい思いをした。そのため「うまく話す技術」の需要が高まり、弁論術を教える人が出現した。人々は高額のｄシャレイを払って弁論術教師の門をたたくようになる。②これがレトリックの始まりとされている。この起源からも分かるように、もともとレトリックは非常に［　　Ａ　　］な性格をもっていた。法廷での証言、議会での演説、儀式・式典でのスピーチ、この三つがレトリックの晴れ舞台だった。

　その後もギリシアではレトリックが盛んだったが、しかしながら体験主義（実地研修）というか、きちんと理論化されることがついぞなかった。そんな状況のなかでレトリックを見事に体系化したのが「万学の祖」と呼ばれたアリストテレスである。彼は前三世紀にヨーロッパで最初の本格的レトリック論、『弁論術』を書いた。そして効果的に説得するにはどんなふうに話題（アイデア）を探したらいいのか（「　Ｂ　」部門）、どんなふうに話を組み立てたらいいのか（「　Ｃ　」部門）、どんなふうに言葉を使ったらいいのか（「　Ｄ　」部門）を考察した。また、聞き手の感情（パトス）への働きかけ（たとえばれみや同情に訴える）や話し手の人柄（エートス）の重要性（たとえば立派な人が話すとつまらない話でもみが増すとか）もｅシテキした。レトリックは理性（左脳）と感情（右脳）の両面から攻める説得術のことだったのだ。昔のレトリックは口演を想定していたので当然のことだが、「発表の仕方」や「記憶の仕方」も取り上げた（「記憶」部門と「発表」）。特に発声や身振りなどの演技的パフォーマンスは重視された。

●語注

活版印刷＝活字を組んだ版による印刷。

口頭弁論＝裁判での陳述。ここでは大勢の前で話すこと。

僭主＝古代ギリシアで、非合法手段により政権を占有した独裁者。

口演＝口で述べること。

パフォーマンス＝人目を引くために行う表現行為。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①とあるが、そうなっていく経緯の中で最大のきっかけとなったものとは何か。本文中から抜き出せ。6点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問２　傍線部②の指す内容を、解答欄に続くように本文中から三〇字以内で抜き出せ。7点

紀元前のギリシアで

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕こと。

問３　空欄Ａに入る最も適当な語句を次から選べ。6点

ア　実利的　　イ　形式的　　ウ　論理的　　エ　言語的　　オ　国語的

〔　　　〕

問４　空欄Ｂ〜Ｄに入る最も適当な語句を次から選べ。5点×3

ア　記述　　イ　選択　　ウ　配置　　エ　修辞　　オ　発想

Ｂ〔　　　〕　　Ｃ〔　　　〕　Ｄ〔　　　〕

問５　波線部の「問い」に対する「答え」に当たる一文を本文中から抜き出し、最後の五字を句読点を含めずに答えよ。8点

〔　　　　　　　　　　〕

問６　本文の内容と合致するものを次から一つ選べ。8点

ア　日本ではレトリックの意味はもともと一つであったが、後に「話す技術」と「書く技術」の二つの意味で使われるようになった。

イ　レトリックの起源は紀元前五世紀のギリシアにまでさかのぼるが、その発祥にはアリストテレスが深くわっていた。

ウ　レトリックとはもともと「弁論の技術」という意味なので、議会での演説がその能力を発揮する最大の晴れ舞台であった。

エ　現在、我々が使うレトリックという言葉には、「修辞学」以外にも「雄弁術」や「弁論術」という訳語が当てられている。

オ　聞き手の感情や話し手の人柄などは、もともとのレトリックの意味からは外れるもので、後年になって含まれるようになった。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ格好　ｂ反映　ｃ訴訟　ｄ謝礼　ｅ指摘

問１　活版印刷の発明

問２　（紀元前のギリシアで）「うまく話す技術」の需要が高まり、弁論術を教える人が出現した（こと。）（30字）

問３　ア

問４　Ｂ＝オ　Ｃ＝ウ　Ｄ＝エ

問５　だったのだ

問６　エ

■覚えておきたい語句

□11　樹立……………………物事がしっかり立つこと。

□14　需要……………………もとめること。入用。

□15　門をたたく……………弟子入りを願って訪れる。

□17　晴れ舞台………………活躍する場。力を発揮するところ。

□20　体系化…………………個々別々のものを統一した組織にかえること。

〔要　約〕

［2］段落の問いに、

［1］段落の一部を加え、

［4］段落の答えを中心にしてまとめる。

　　　　　↓

今ではレトリックといえば「修辞学」を思い浮かべる人のほうが多いが、本来はどういうものだったのか。聞き手の感情へ働きかけたり、話し手の人柄を考慮したりする、理性と感情の両面から攻める説得術のことだった。（100字）

〈筆者＆出典〉野内良三（のうち・りょうぞう）一九四四年（昭和19年）東京都生まれ。フランス文学者、修辞学者。東京教育大学卒業。静岡女子大学助教授、高知大学教授を経て、現在は関西外国語大学国際言語学部教授。ランボーなどフランス詩に関する専門書なども執筆しているが、日本語やレトリックに関する著作も多い。著書に、『ジョーク力養成講座』『日本語作文術』など。本文は、『レトリックのすすめ』（大修館書店、二〇〇七年）より。

【読みのセオリー】

★筆者の話題提示と見解

　評論文には必ず、問題提起と筆者の見解・主張が述べられている。それを正確にとらえていくことが読解である。決して散漫に読んではならない。その二つを見つける意識で読むことが、読解力の養成につながる。

■読みのセオリー［実践］筆者の話題提示と見解

問５　本文全四段落の中で、「問題提起」と「筆者の主張」の対応関係にある段落は、何段落と何段落か。

問題提起　＝［１　　］段落

筆者の主張＝［２　　］段落

　この二つの段落の中から、それぞれ「問い」と「答え」に当たる一文に絞り込み、それをつなげて一文化してみよう。

　　　　↓

［３　　　　］ とは本来、弁論による［４　　　　］のことだったのだ。

〔解答〕　１［2］　２［4］　３レトリック　４説得術

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊新問

問７　６〜７行目「レトリックに二つの意味がある」（6〜7行目）とあるが、何と何か。

　［答］「うまく話す技術」（弁論術・雄弁述）と「うまく書く技術」（修辞学）

＊新問

問８　「問７」で解答した意味のうち、元々の意味はどちらであったか答えよ。

　［答］「うまく話す技術」

＊新問

問９　５行目「『修辞』がレトリックを代表する」とあるが、そうなっていった理由を簡潔に説明せよ。

　［答］「書くこと」の重要性が増してきたから。